

第3回（仮称）第2次札幌市立高校教育改革方針の 策定に向けた検討会議 会議録

1 日時

令和8年（2026年）8月7日（金） 10時00分～11時30分

2 会場

STV北2条ビル6階 AB会議室（札幌市中央区北2条西2丁目）

3 出席者

(1) 委員

山中 康裕	北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授
杉山 晋平	明治大学文学部 専任准教授
石本 茂史	札幌商工会議所 事務局長
土田 美那	AWL株式会社 CHRO兼上席執行役員
林川 希	札幌市PTA協議会 副会長
名達 諒	市立札幌大通高等学校 卒業生（合同会社RaShiRa代表社員）
谷 郁果	市立札幌開成中等教育学校 卒業生
林 匡宏	株式会社commonsfun 代表取締役
松田 考	公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会 子ども若者支援担当部長
信田 篤	市立札幌清田高等学校 校長
久保 和也	市立札幌彩輝高等学校 校長
牧野 弘幸	市立札幌平岸高等学校 副校長
加世田 一憲	市立札幌新川高等学校 副校長
細田 亜紀子	市立札幌藻岩高等学校 教頭
勝田 敏正	市立札幌啓北商業高等学校 教頭
幸丸 政貴	市立札幌大通高等学校 校長
畠山 正樹	市立札幌開成中等教育学校 教頭
加瀬 富久	札幌市立円山小学校 校長（札幌市小学校長会 副会長）

(2) 事務局

吉田 憲史	札幌市教育委員会 調整担当部長
上野 千沙	札幌市教育委員会学校教育部 学びのプロジェクト担当課長
村山 拓己	札幌市教育委員会学校教育部 学びのプロジェクト担当係長
西野 功泰	札幌市教育委員会学校教育部 高等学校担当係長
坂間 卓朗	札幌市教育委員会学校教育部 高等学校担当係長

4 会議録

【事務局：上野高等学校担当課長】

ただいまから第3回（仮称）第2次札幌市立高校教育改革方針の策定に向けた検討会議を開催させていただきます。私は本日の司会を務めさせていただきます、4月より着任しており

ます、札幌市教育委員会学校教育部学びのプロジェクト担当課の上野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。なお本日の会議ですが、札幌市PTA協議会の林川委員、旭丘高校の小泉委員が所用により欠席されているほか、開成中等教育学校の谷委員がオンラインで参加されておりますのでご報告させていただきます。

それでは早速議事に入らせていただきます。事務局より「新委員について」「これまでの協議を踏まえた次期高校改革の方向性」の2点について、ご説明をお願いいたします。

【事務局：村山高等学校担当係長】

私から「新委員」についてご説明させていただきます。本会議ですが、令和8年度に入ってから初めての開催となりますので、人事異動等で一部委員の変更がございます。昨年度まで、清田高校から三関校長先生に参加いただいておりますが、今年度より、信田校長先生に委員として就任いただいておりますのでご報告いたします。信田校長先生から一言お願いしてもよろしいでしょうか。

【信田委員】

おはようございます。4月から清田高校で校長を務めています信田と申します。よろしくお願いいたします。

【事務局：村山高等学校担当係長】

ありがとうございます。なお、委員の変更はございませんが、新川高校から平岸高校に牧野委員が異動され、平岸高校から新川高校に加世田委員が異動されていますが、引き続き委員に就任いただいておりますので、併せてご報告いたします。以上、新委員についての説明となります。

【事務局：西野高等学校担当係長】

学びのプロジェクト担当課、高校担当の西野でございます。私からは、「これまでの協議を踏まえた次期高校改革の方向性」についてご説明いたします。

本日お話しする内容につきましては、第1回の検討委員会にて各学校の特色・魅力や合同の取り組みを一度ご説明しておりますが、その後のワーキング会議で検討を重ねてきた内容と深く関係しておりますので、改めてポイントを絞ってご説明させていただきます。

本市では、平成15年からの改革推進計画、平成29年からの高校教育改革方針、そして現在の実行プランに至るまで、各学校の魅力化・特色化、市立高校合同の取組、そして地域等との連携・協働による学びを推進してまいりました。こちらの年表にございます通り、2004年の旭丘高校の単位制移行をはじめとして、来年2027年4月には彩輝高校が開校する予定となっております。各校の魅力化・特色化の概要として、再編新設校について簡単に触れさせていただきます。スクールミッションはご覧の通りです。学科構成は、普通科の未来デザイン科5クラスと商業科である、ビジネスイノベーション科3クラスとなります。学科や学年の枠を超えた相互の学びを展開していきたいと考えております。また、単位制の導入や放課後を自分でデザインするという観点から日課時間を工夫し、月曜日の放課後には生徒が探究活動や部活動に主体的に取り組める時間を確保いたします。さらに、総合的な探究の時間の拡充に加え、未来デザイン科の生徒が商業系科目を履修できるようにするほか、商業系科目についてはすでに複数の外部企業との連携に向けた相談を進めております。

次に合同の取り組みについてです。当初は各校の特色化を図りつつ、市立高校共通の取組として「国際理解教育」「進路探究学習」「学校教育相談体制」の充実を図ってまいりました。そして、平成29年度の現行改革方針以降は、これからご紹介するような一歩踏み込んだ取組に挑戦しております。

1つ目は「進路探究セミナー」です。市立高校8校に入学した約2,000名の新入生が、将来の生き方や進路について考えることを目的に、毎年5月に開催しております。

2つ目は「学校連携プログラム」です。食農体験や起業化教育、まちづくりなど、多様なテーマを設定したプログラムで、市立高校に在籍する生徒であれば誰でも参加可能となっており、学びの成果を体現する場となっています。

3つ目は「市立高校プレゼンテーション大会」です。各校の特色ある取組や探究活動について中学生や地域の方々に発信するとともに、市立高校生同士が刺激し合う学びの機会として、毎年年度末に開催しております。約200名の生徒が成果発表を行っています。

続いて「地域との連携・協働による学び」についてです。令和6年度より、「高校と地域をつなぐコーディネーター」を各校に配置し、地域・企業・大学等との連携を強化しております。コーディネーターの方々は、日頃からまちづくり、教育、企業コンサル等に携わっている専門家であり、各校の教育活動の幅を広げていただいております。学校内にとどまらず地域を学びのフィールドとすることで、生徒が多様な価値観に触れ、大人と協働しながら「自分たちにもできる」という自信を育む機会を創出しております。資料に掲載されている大きな写真は、清田応援団の取り組みです。清田高校を応援する地域や企業の方々が一丸となって支える仕組みが、昨年度よりスタートしております。また、プレゼンテーション大会と同時開催いたしました「まちづくりコンペティション」は教育委員会ではなく、まちづくり政策局が主催しており、優秀賞に選ばれた提案は、まちづくり政策局のサポートを受けながら実際に事業化・実施されます。高校生ならではの視点を実際のまちづくりに生かす貴重な取組です。

続きまして、昨年度実施したアンケート調査の結果をご報告いたします。「学んだことを応用する力」「課題を発見する力」「課題を解決する力」「他者と協働する力」など、資質・能力に関する各項目において、非常に高い評価結果が出ております。教育内容の満足度や主体的な学びの育成、興味・関心の拡大についても、約80%以上の高い肯定率となりました。一方で、「自身の状況の肯定」や「地域への貢献意識」の項目についても決して低くはありませんが、今後さらに伸ばしていきたいと考えているポイントです。

また、「もっと自分の興味・関心に応じた授業を受けたい」「他の市立高校の生徒と一緒に学びたい」「他校の授業を受けてみたい」といった、より深みのある学習機会を求める生徒の声が寄せられました。

これらを踏まえ、次期改革に向けた検討を行ってまいりました。予測困難な時代において、生徒一人ひとりの個性や興味・関心に応え、可能性を最大限に伸ばす。そのための「これからの市立高校のあり方」について検討を重ねてまいりました。

本日までの協議経過ですが、第1回の検討会議に続き、第2回はワーキング会議のメンバーと合同で開催いたしました。ワーキング会議は本日までに計6回開催し、議論を深めてまいりました。市立高校のあり方・役割については、小・中・高の連続性における役割、市立高校が持つ公共的意味、札幌市が目指す都市創造・まちづくりとの連動。育むべき生徒像につきましては、非認知的能力の育成、テクノロジーへの探究心、様々なことに挑戦する意欲。学びの環境については、生徒の選択肢を増やす工夫、他校の魅力を相互に享受できる仕

組み、誰一人取り残さない教育の視点。学校・教員を支える仕組みについては、校種を超えた教員同士の学びの共有、教師の学びを保障し、サポートする体制構築というご意見がございました。

これらの協議を通じて見えてきた方向性は、「各校の取組の充実」に加え、培った強みを共有資産として、互いに生かし合うことです。単一の学校では成し得ない挑戦や多様なニーズに対し、市立高校全体を一つのコミュニティと捉えていく、新たな可能性の時代に突入してきたと考えております。学校の枠を超えて生徒や教職員がつながり、授業や探究プロジェクトを持ち寄って磨き上げる。面としての市立高校コミュニティ化を図っていく考えです。

これに伴い、これまで議論してきた「育てたい生徒像」についても検討いたしました。委員の皆様からの「生徒を大人の枠にはめるのではなく、大人も子どもも共に目指せるビジョンにすべきではないか」というご意見もありました。そのことも踏まえ、開成中等教育学校が掲げる「生徒の姿」「大人の姿」という表現を参考に検討いたしました。札幌市全体として「自立した札幌人」という目指すべき人間像がすでに示されていることから、市立高校は「その人間像を育むために、どのような場であるべきか」を整理すべきであり、市立高校全体に共通するスクールミッションを新たに定義してはどうかという整理となりました。

次期学習指導要領や札幌市まちづくり戦略ビジョン等を踏まえ、ワーキング会議で時間をかけて検討した市立高校全体のスクールミッション案が次の3つです。

1つ目が「好奇心を力に探究する場」。2つ目が「境界を超えて共に歩む場」。3つ目が「自分を理解し深める場」としてあります。1つ1つの言葉の説明につきましては次のページに掲載した通りです。

「好奇心を力に探究する場」につきましては、『一人一人の「なぜ」「知りたい」を力に自ら問いを立て、試行錯誤や対話を重ねながら探究を深め、一人一人が学びの主体となる。』『自ら考え行動し、学び続けながら未来を切り開く力を培う。』

「境界を超えて共に歩む場」については、『人や場所、文化や思想等の枠組みを飛び越え、互いを認め合い、響き合い、繋がる場。』『社会の一員としての責任感や協働する力を培う。』

3つ目の「自分を理解し深める場」については、『自己対話や他者との関わりの中で自らの強み、弱み、関心、大切にしたい価値観等を多角的に見つめ直す場。』『自己効力感、自己有用感を育みながら、自らの意志で人生の進路を選択、設計する力を培う』と一旦整理しております。

なお、これら3つは段階的なものではなく、互いに重なり合い、循環しながら深まっていくイメージです。

さらに、このコミュニティを支える協働の仕組みとして、コンソーシアムの構築をあげています。地域・企業・大学等との連携を一对一の点から組織的な面に広げ、生徒だけでなく、大人同士も学び合う関係性を構築することで、持続可能な地域社会の形成と、高校を核とした魅力ある地域づくりを目指すものです。

これまでは、高校と地域をつなぐコーディネーターの配置ということで、先ほどご説明させていただきましたが、人材を配置しているところですが、今後は取組推進の基盤となる仕組みの構築をしていくというものになります。コンソーシアム構築による効果として、「ステークホルダー全体での目標共有と一体的な教育活動の展開」「多様な社会人との対話による生徒の視野拡大」「各校の強みの交差による新たな価値・取り組みの創出」「属人化しな

い組織的な協力関係の構築」「関わる大人自身の学び合いと成長の場の創出」の5つを挙げています。

最後に、これまでご説明してきた内容のまとめになりますが、今後、具体的な施策や取組について検討を進めていく上での考え方です。まずポイント1として市立高校をコミュニティ化し、市立高校群スクールミッションを定義する。さらに、各学校の特色化を図ることによってこの面がアメーバ状にどんどん広がっていく。そのためには、各学校の努力だけではなく、市立高校コミュニティ全体として支える仕組みとしてコンソーシアムを構築していこうという考え方でございます。

こうしたことを実行することによって引き出したい生徒の姿をイメージとして載せさせていただいております。「同じ市立高校でも他でこんな授業があるんだ。私も参加してみたい」ですとか、「私も〇〇高校の〇〇先生の授業を受けてみたい」ですとか、あとは「色々な人との対話によって自分の考えが広がっていく」こういった姿をたくさん引き出していきたいと考えてるところでございます。

本日皆様に内容を確認していただいて、具体的に進めていくための考え方として基本的方向性を2つ、ワーキングでは整理しております。1つはコインの裏と表のイメージでお聞きいただければと思いますが、表面が、各校の特色と市立高校コミュニティを生かした生徒の個性や能力を伸ばす質の高い教育活動の充実を図っていくこと。そのため、こちらには、様々な教育実践、生徒一人一人のニーズに応え個性や才能を伸ばす特色ある教育プログラムや、誰一人取り残さない教育活動に取り組むという内容が入ってきます。そして、それらを実行するために、各校や市立高校コミュニティの教育活動を支える取り組み、仕組みの充実がコインの裏側、こちらで図られてます。多様な取り組みを支えるため地域や企業、大学等と連携協働したサポート体制を構築する。また、先生方の研修を充実させたりですとか、働きやすい職場環境作りを推進することによって、学校の教育力を高め、生徒の学びのさらなる充実へとつなげていくということでございます。

以上が、これまでワーキング会議で皆様からも頂いたご意見を反映させて、まずは大きな方向性として整理した内容でございます。

私からは以上です。ここから、山中委員長に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【山中委員長】

ありがとうございました。ここから協議に入ります。本日は、皆さんの発想を豊かにするような座席配置になってると思います。今、事務局から説明があった次期高校改革の方向性について、全体協議の場で委員の皆様からご意見やご感想を伺う前に、15分ほどテーブルごとにざっくばらんに意見交換していただきたいと思います。グループの意見をまとめてもらう必要はありません。今の説明で感じたこと、こういう視点も大切だなとかそういうことを意見交換を通じて、このあとの協議に向けて頭の整理をする時間にいただければと思います。

その後、通常の委員会と同じように、一人一人の委員のご意見をいただきます。グループのなかで話す内容は議事録等には残りません。しっかり残したいという場合は、後でご発言をしていただくということで進めていきたいと思います。

それでは10時40分頃までを目処にテーブルで話し合いをよろしくお願いいたします。

<グループごとの意見交換>

【山中委員長】

それでは、皆さん、自分の考えが、だいた言語化できたと思いますので、各自発言をということになります。どなたかご意見がある方はいらっしゃいますか。

はい、林さん。よろしくお願いします。

【林委員】

まずここまでのまとめ素晴らしいなど。見ている方もワクワクします。

そのうえで1点目ですが、コンソーシアムにするところのリスクもしっかりと考えていけるといかなという話がありました。私も仕事柄こういったことをよくやりますが、組織にした途端つまんなくなるケースってめちゃくちゃある。やっぱり先生方も1番楽しいのは生徒がどんどん変容していったり変わっていく様だと思うんですけど、組織になった途端、例えばコンソーシアムだの、コミュニティだの、市立高校コミュニティのスクール・ミッションみたいなのができた瞬間に、それぞれのいいところ取りをすると、どこにでもあるような言葉になるとこれまた危ない。あとは単純に会議体になると、じゃあそこに誰が出るんですか。月1会議やるってなって、進行役とかファシリテーションはめちゃくちゃ大事です。そのコミュニティが楽しい、また参加したいって思うようなものになってこないともう行きたくないってなります。コンソーシアムは、多分会社とは言わないまでも組織になると思うので、常に戦略を更新する人や部署が必要でしょうし、実践するところやプロモーションするところ。広報して色々メディアにも取り上げてもらうことも必要でしょうし、なんなら予算も教育に頼るんじゃなくて、どんどん外から集めていくっていうこともできると思うんです。これだけの力が集まってきたら、その資金調達も必要ですし、商工会と連携して1つの授業でするぐらいのこともあってもいいのかもねって話もしました。本当に組織を形骸化させない工夫みたいなのは、すごくあるといいと思います。

【山中委員長】

ありがとうございます。他は次がいかがでしょうか。石本委員お願いします。

【石本委員】

このメンバーで経済界って私だけだと思いますが、その立場からというか、先ほどグループで話していて林さんからもありましたが、「なんで特別支援学校がこの中に入っていないんだ」と質問があって、私も強くそう思います。立場的に人を見る時にどうしても私どもというか、労働市場の観点で見てしまうので、この方が仕事でどういう活躍をされるかっていう風に見てしまいます。あまり良くないんですが。また、市立高校の卒業生の進路が分かりませんが、高卒で就職した方の3年以内の離職率は確か40%近いはずなんです。高校卒業して就職して3年以内に1回はやめられる。大卒も30%ちょっとぐらいなので、それほど差はありませんが、高卒は多いという中で、では高校生が自分の進路を考えていくっていう時に自分がやりたい学びを得るとしたなかで、私ども努力不足もあるのですが、市内にはすごくいい仕事がたくさんあるんですよ。でもPCの業務会社ばかりが高校生とか大学生の目に触れていく。こんな仕事あるんだっていうの僕らがもっとこう高校生とかに説明しなきゃいけない、説明責任をちゃんと果たしたいというのが私どもの中で話がありまして、そう考えた時に高校の中で、こんなような社会の貢献の方法がある、仕事がある、稼ぐ手段があるということを是非、教育委員会の皆様とも連携させていただいて、ご提供したい。社会で稼ぐっていうところ、仕事とかがあって

ころをこう私としても示していきたいなという風に思った内容でございました。取りまとめに関してはずいぶん素晴らしいものだと思います。最後もう1個だけ言うとすれば、各校それぞれの特徴を際立たせるっていうと、先生がとても大変になるだろうなと、外から見てて思いますので、先生に対するサポートの充実っていうところも大事になるのかなという風に思いました。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございます。こういう視点も大切だというご意見もありました。他はいかがでしょうか。土田委員。

【土田委員】

よろしくお願いいたします。一般企業に身を置く立場から拝見しておりますと、従業員数は徐々に減少し、中堅層の人材も他へと流出しつつあります。そうした中で、日々対応に追われる状況が続いており、「これがこれからの世の中なのだ」ということを実感しております。

学校現場におきましても、生徒数の減少や教員の離職、採用上の課題が目前に迫っております。そうした中で、特色ある学校、選ばれる学校となることは大変重要なことでございますが、掲げられている内容がいささか立派すぎるようにも感じられ、これを拝見した際に、自分が教員の立場であったならば「相当な重圧ではないか」「これをどのように実現していくのか」と受け止めるのではないかと、少し考えさせられました。

学校のオペレーションという観点からも、例えば5年先を見据えた際に、ここまで実現できるのだろうかという思いがございます。私自身、社内で「仕事の質を下げてください」と申し上げなければならぬ場面が増えてまいりました。同様に、何を残して取り組んでいくのかという見極めは、心苦しさを伴うものではありますが、大変重要な視点ではないかと考えております。

それでもなお取り組みたい事柄につきましては、テクノロジーの力を借りて実現する方法を考えていかなければならないと思います。私自身、現在ひそかに開発を進めておりますが、やはり生徒一人ひとりに目を向けたいという思いから、AIを活用して一人ひとりに問いかけ、それをどのように教員へフィードバックするかといったことを検討しております。そうした部分をテクノロジーでいかに補っていくか。教育とテクノロジーは乖離しがちではございますが、そのような観点もあるとよいのではないかと感じました。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございました。

確かに今回は方向性、ビジョンみたいなもの、スクールミッションにつながるようなものなので、理想を高く掲げるのはどうしても必要なことだと私も思います。ただ、やはり現実の課題みたいなところと比べると、左に振れ過ぎたから右に振った方がいいとか、右に振れたから左に振った方がいいとか、実際の実装に落とし込んで具体化する時には、理想高く突っ走らないで地に足がついたものも必要かなというのは、私も最初に感じたところがあります。

あと併せて言いますと、この中で出てきたポイント3の仕組みがとても重要なことだと思っていて、やはり先生たちが本当に生き生きと働けるためにはポイント3の仕組みがとても重要です。特に一番最後の「多様な他者との学び合い、先生の学び合いの場の創出」ということ

がやっぱり重要で、ちょうどここに開成中等教育学校などの先生がおられるので、開成のように月曜日の午後は研修とかそういうのに充てるといった取組を、他の高校でも導入して全部に共通化させていくみたいなことも必要なのではないかというような意見が出ました。

また、私の方からひとつお節介をすると、「研修」という言葉が非常に堅苦しくてやめたので、何か新しい名前を作った方がいいんじゃないかと。先生の学びの場として、みんなが行きたくなるような名前をぜひ作ったらどうだという意見を述べさせていただきました。

それと、この理想が実現されるためには、先ほど林さんから言っているように、ファシリテーションとか対話とか探究というのも「もうやんなきゃいけないから」ということでOJTのように先生たち頑張って作ってきているけれど、もう1回全部見直す。特に振り返りとか、そういう基礎的なところをもう1回先生たちが学び合う場所みたいなのは、結構必要になるんじゃないかと思います。どうしてもコーディネーター任せになれば属人的になったりするので、先ほど林さんが言ったように「組織にするとちょっとつまんなくなる」みたいなところをいかに防ぐかということも重要なかなと思いました。他はいかがでしょうか？

松田委員、お願いします。

【松田委員】

お願いします。松田と申します。

一度、極めて教育的かつ理念的な議論を1回脇に置いて、もっと生々しく「私立高校が無償になって子供がそっちに流れるけれど、市立高校を選んでもらえるにはどうしたらいいだろうか」という身も蓋もない現実的な議論に時間を取ったとしたならば、もう少し具体的になるんだろうな、ここで話していて個人的に思いました。

というのは、その「市立高校というブランディング」ですね。中学生や親が、私立を選ぶか、公立を選ぶかみたいな時に、私立というのはとても教育にお金を投資していて、行事は面白くて、校舎は綺麗で、制服が素敵で、個性的な授業があって、でも高いから選べないなというところがあったわけですが、無償化になって選ぶとなった時に「私立」というカテゴリーのイメージがあるじゃないですか。その時に「市立」というカテゴリーのイメージってあるかと言うと、今のところ特になくて、それを作って私立じゃなくて「市立」を選ぶとするならば、そこで持つ強みって何だろうと。

別にそこに行けば他の市立校、清田や平岸などの方と交流できるとか、一緒に何かができるということが、何か強みとして果たしているのかというのはちょっと私は疑問があります。私立というカテゴリーに対抗する「市立」というブランディングを考えたら何だろうという、入学者を獲得するということだけに特化した身も蓋もない議論に少し時間を取ると、また違う視点で出たりするのかなということを申し上げます。

【山中委員長】

ありがとうございます。とても重要な視点だと思います。やはり方向性を考えなきゃいけないで、これをまとめたのも大変ご苦労で素晴らしいと思うんですが、地に足の着いたというか、その部分の議論というのはとても重要なかなと思います。ありがとうございます。他はいかがでしょうか？名達さん、よろしくお願いします。

【名達委員】

名達と申します。中間報告を聞いて感じたことをお話しできればと思うんですけど、大きく分けて2つあります。

1つは、AI時代とか予測困難な時代というところで、もっと教育を加速していかなきゃいけない、新しい教育を届けたい、という思いがあってこういう会議が開かれていると思っています。その中で「自立した札幌人」という言葉が根幹になってしまうのは、果たしていいことなのかなというのが個人的に思ったことです。先ほど調べたことなので正しい情報か分からないんですけど、「自立した札幌人」という1つのテーマが2014年に策定されたものという風に出てきたので、もしそれが正しいとするのであれば、今の時代に新しいものを考えている中で12年前のものに戻ってしまうのはちょっともったいない気がするなという点です。

もう1つはそれを考えた時に、大きな組織になっていくことよりも、生徒の変化であったり今の時代の変化に一番敏感に気づけるのは各校の先生方であったり校長先生、教頭先生の方々だと思うので、そういった方々を軸に魅力化を進めていくとなった時の、先生たちの難しさを支援できることの方が大事なのかなと。組織体としてはそれぐらい足が軽い方が新しい教育にどんどんチャレンジできるのかなというのを、聞いていて感じました。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございます。また新しい重要な視点が続いたと思います。加瀬委員、よろしくお願いいたします。

【加瀬委員】

円山小学校の加瀬です。よろしくお願いします。

今までのテーブルでのお話と今までの話を聞きながら、ちょっと感想ということでお話しさせていただきたいなと思っております。

「スクールミッション」という言葉を前回・前々回に聞いて「これすごくいいな」と思って、ぜひ小学校にもポスターなどでバーンと示して魅力を発信してくれたらいいなってお話をしたのを覚えております。今日来てだいぶ素敵なものが出来上がっていて素晴らしいなと思います。

これ見ながらちょっと思ったんですけど、私小学校なのでこれは半分暴言として聞いていただきたいんですけど、僕昔担任していた時にある校長先生から「学校独自のものと言うけれど何ができると言う？」って聞かれた時に、「いや色々あると思います、地域ならではのこととか」と答えたら、「いやそうなんだけど、結局小学校は97%はやること決まってるんだと。独自のものなんてせいぜい3%くらいだよ」と言われたことを今でも覚えています。そのパーセントの数字云々よりも、学校として「やらなくてはならないこと」はあって、その「やらなくてはならないこと」をいかに効果的に、いかに魅力的に、いかに力につけていくかということで「独自のもの」ってきつとあるんだろうなという風に思うんです。

これを見てすごく素敵なんですけど、スクールミッションがあっていろいろみんなで考えてやるんだけれども、最後の一步は集まってくる生徒とそこにいる先生と校長先生とで自分たちの高校をどういう風にしていくかという最後の一步を作り出していく。ここにある足りないものをどうやっていくかというのを地域の声や保護者の声を聞きながら、働く先生たちの話を聞きながら、学校で独自に作っていくものなんだろうなということを考えながら聞いておりました。

もう一つは「魅力」というところです。確かに自分が高校受験云々の時って何十年も前ですけど、公立か私立かという区別はあった記憶がありますが、道立と札幌市立をあんまり意識は確かにしていなかったなという風に思います。それはいいんですけど、結局魅力を発信

していくことと、コミュニティということと、やっぱり生徒・子供たちが「居場所」として感じられるというところに魅力を持っていてほしいなという風に思います。方向性の中にもいろんな言葉がありながら、実は不登校とか「誰一人取りこぼさない」ということがさつきありましたけど、入ってみてそこでつまずきそうな生徒って必ず出てくる。いるのを前提として、そういう時でも「大丈夫だよ、見捨てないからね。仲間もいるし頑張っていこう」と、居場所として安心できるよというところは結構魅力になっていくのではないかなとは思いました。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございます。大切なご指摘だと思います。

ひとつ意見させていただきたいのですが、学校間連携とかコミュニティと言う時に、交流すること自体が目的ではなくて、例えば各学校にごくマイノリティな違和感を持った人がいたとしても、コミュニティとしたら人数が作れるとか、学校で学ぶには10人も集まらないから開講できないけれど、これ全体としては開けますよね。例えば地学なんていうのは、地学基礎まではやってるけど開講できないなんてこともあるでしょうし、そうやって何校かの学校の人が集まるとできる。例えば地域課題みたいなことになれば「ジェンダー・エクイティ」とかそういうものも、各高校では少数の人数だし先生もちょっと教えられないけれど、全部集まれば1つちゃんと男女共同参画センターの人を講師として立てられるとか。各学校ではちょっと難しいけれど集まれば1つ授業が作れるみたいなことも、こういう学校連携の体制の中に入れてもいいんじゃないかという希望があります。実は私もそれをやりたいと思っていて提案しようと思っていますが、思い出しましたので意見させていただきます。交流自体が目的というのも重要ですがそれだけじゃない。マイノリティが集まると多数派も作れる、授業が作れるんじゃないかと。だから尖ったAIならAIのすごく尖った授業もできるかもしれません。その他いかがでしょうか？谷さん、お願いします。

【谷委員】

ありがとうございます。音声聞こえておりますでしょうか？市立開成出身の谷と申します。今日はオンラインで参加させていただいております。

ここまでの共有をお聞きしまして、感想ベースで何点かお話ししたいなと思っております。各校とコミュニティによる協働の仕組みというところで、これを聞いて自分自身の高校時代の学びを振り返っていたんですけど、やっぱり生徒同士や先生、社会人、大学の先生、企業の方とか、たくさんの関わりの機会があればあるほど、他者を知れば知るほど自分を知ることになるんだなという風に振り返っていました。対話して自分の考えを言葉にしたり、他人の考え方を聞いてそれに対して自分がどう思うかというところで、自分の意見とか、自分はということが好きでどういうことに興味があって、どういうことをもっと学びたくてみたいなところを深めていったなということを思い出していました。

加えて、あまり触れられていなかった教科学習のところですが、学校で学んでいる教科も、そういった対話や学校外の学びを通して、机上の学びとして終わらずにというか、生きた学びとして自分の中に深い学びで落とし込めるようになっていたなということも思い出しました。教科学習が点数を取るためだけの勉強ではなくて、その先にこういった面白いことがあるんだとか、自分の好奇心を追求するようなことがあるんだという、点数だけを追求する学びじゃなくてワクワクや主体性を伴った学びになっていたなと思います。結果として

同級生は目的を持って進路を選び、そこに行くことがゴールじゃなくて、そこでどんなことをしたくて、どんな社会人になりたいかみたいなことがしっかり目的を持って、手段としての教科学習ができていたなということを思い出したので、決してこの探究を軸に置いたからと言って教科学習が疎かになるのではなくて、そこも相互に関連していい効果をもたらすということは私自身実感を持っているので、教科学習がないがしろになっているわけじゃないということは、きっとそういうことなんだろうなという風に思っていました。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございます。おっしゃる通りで、探究と教科の知識を得るというのも決して矛盾したものではなくて、文科省の方向も探究を全ての教科に入れると。ただ知識を詰め込むというところとは時間の使い方が違うけれど、今谷さんがおっしゃったように、自分の人生というかも少し長い目で見た時には教科が本当の自分に役に立つという意味で実践があったと。そういう時に学校間連携などのプログラムが非常に多かったという話でいいでしょうかね。勝手にまとめさせていただいたんですけど、とても素敵なお意見だと思います。他はいかがでしょうか？

杉山副委員長、よろしくお願いいたします。

【杉山副委員長】

着席のまま失礼します。今回の提案の中で「コミュニティ」という言葉がかなり強調して使われているのが、新しい提案になっているなという風に思いました。市立高校全体のこの繋がりをコミュニティとして考えていくという提案かと思いますが、このコンセプトからいろんなことが考えられるなと思います。

例えば、1つひとつの学校の中でも、日々の授業であったり、クラスであったり、部活動であったり、実は大小様々なコミュニティが実践を単位にして生まれているんだろうと思います。学校行事であったり、教員同士の研究会であったり、検討委員会であったり、いろんなコミュニティが組み合わさって1つの「学校」という、有機体としてのコミュニティが作られているという考え方もできる。そうすると、市立高校全体のコミュニティなんですけど、そもそもそれをつくっている1つひとつの学校もやっぱりコミュニティであると。それを構成している小さな授業や探究1つひとつもやっぱりコミュニティであると考えられる。あえてそこで「市立高校のコミュニティ」という言葉を持ってくると何が表現できるかと言った時に、そういったコミュニティの繋がりとか重なりを表現できるんだと。つまり1つひとつの授業であったり探究というものも、バラバラに発生するんじゃなくて、1つの学校をつくっている大切な取り組みであるし、市立全体として見た時もまた1つの大切な取り組みであるという風に考えることができるのかなと。

一周回って、この「市立高校のコミュニティ」について、先ほど加瀬先生のお話に重なってくる部分かなと思いますが、日々の中で取り組まれているような1つひとつの実践もコミュニティなんだとすれば、そのような生徒が居場所と感じられるような1つひとつのコミュニティから見た時に、「市立高校のコミュニティ」に続く風景がどのように見えるのかという、もうちょっとエコロジカルに全体像を表現することもできるのかなと。

市立高校のコミュニティ全体を活性化していくというのは、実は1つひとつの学校のコミュニティをどれだけ大切にしていけるか、その学校をつくっている1つひとつの実践をどれだけ大切にしていけるか、それによって先生の授業実践や生徒たちの探究が元気になっていくという循環ですね。コミュニティとそれぞれの具体的な実践の循環をうまく描いてメッセー

ジとして発信できたら、各校で苦勞されている先生たちとか、今チャレンジしようとしている先生たちと一緒に共有できるような全体像になっていくのかなと思いました。

もう1点、先ほど林さんがお話されていたことに非常に私も共感するんですが、こういうコミュニティという言葉を使うことで意識できることは、各校の取組を繋いで活性化させていく時に何を作っていけばいいのか、何を制度化して何を保証していくことが全体の活性化に繋がっていくのかという問いです。経験的にも審議会とか会議体を作って代表者が集まって年に何回か集まろうということだけをやっても、それ自体は多分全体を活性化するものではないということですね。コミュニティですので、そういう実践を通じて対話を重ねながら繋がりが立ち上がっていく、活性化していくということを考えると、何かをルール化したり制度化したりということ自体ではなくて、お互いに出会ってお互いの取り組みに光を当てて元気になっていくような振り返りを行うとか、コミュニティを元気に育んでいく、コミュニティの成長を支えていくための仕掛けが何なのかというところが次の検討課題になってくるのかなと思います。

例えば、教員の研修の枠組みをセットすればこれがうまくいくわけではなくて、先生たちのチャレンジを後押しする取組とか仕掛けってというのが何なのかという問いなのかなと思います。従来の枠組みにとらわれない発想が強く求められるなと感じます。以上です。

【山中委員長】

ありがとうございます。重要な指摘がたくさんあったと思います。ここだけのコミュニティじゃなくて、あらゆる場所にコミュニティがあるから、この市立高校コミュニティというのは各校が集まるだけじゃなくて、各校の中にあるコミュニティ同士でどういう連携があるんだろうということ。それと審議会や会を作ればいいってだけじゃないので、そこでどういう風にすればサポートしてコミュニティがうまく回るかというようなことをまさに考え、今日もこういう対話の場を設定したというのは、まさに1つの素晴らしい発想の仕方かなと。

話は変わりますが、一つ思い出したことがあるのでお話をさせていただきますが、第1回目の会議の際にもお話しましたが、札幌市の目標は「持続可能な世界都市を目指す」と。魅力ある都市とか世界から見て札幌が素晴らしいような人を作る時に、市立高校も貢献したいと考えると、「国際化」とかそういうものをどういう言葉の中に組み込んでいくかというのを今後検討していただきたいなと。単に英語が喋ればいいのかAIができればいいということではなく、真のダイバーシティ&インクルージョンが分かるとか、いろんなことが入ると思います。「市立高校生に30年後の人たちに何をプレゼントするか」みたいなことを具体的にする時に考えていただきたいと。それは全体でもいいし、「うちの高校でやりたい」とかそういうのでも構わないと思います。はい、いかがでしょうか？土田委員、お願いします。

【土田委員】

確かに、先生がおっしゃるとおり、「インターナショナル」という視点が含まれていないことは大きな課題であると思います。このたびインド工科大学を訪問いたしますが、海外におきましては、研究インターンシップなどを通じて、海外での経験が学校生活の中に組み込まれております。それに比べますと、日本の高校生にはそうした機会がほとんどないのではないかと感じます。英語はもとより、コミュニケーションの面におきましても、もう少しグローバルな感覚が必要ではないかと思っています。教員につきましても海外人材の登用や国際交

流を進めていく必要がございますし、北海道は観光の面でもいま一步進んでいかなければならない状況でございますので、必要な視点であると考えます。

【佐藤委員】

座ったままで失礼します。高校PTA会長の佐藤と申します。よろしくお願いします。

この会に参加させていただいて、大変貴重な経験をさせていただいているなと思っております。私は保護者の代表という形で参加しているつもりですので、このコミュニティ化などを取りまとめていただいたのを見た時に、とても素晴らしいなと思いました。うちの子は一番下の子供が高校3年生で卒業してしまうので、私の次の子たちのために今この会議に参加しているんですけど、こういうことができるのなら本当に素晴らしいなと思います。

また、私も「育てたい生徒像」という表現は、やっぱり大人の考えの中にある子供たちの姿というところでいくと、ちょっとこれからに関しては危ないかなという気がしています。

あと、いろんな地域の方と繋がってコーディネーターを活用してというのはとても素敵なんですけれど、大人が用意する「こういうチャレンジができる場」「研修できる場」ではなくて、子供たちからもっと「どういうことをしたいのか」「どういうことに興味があるのか」というのを集められる機会があった方がいいのかなと感じました。このままの感じで行くと、小学生の時にあった地域の探究活動みたいな感じになってしまうのではないかなという気がして、もうちょっと子供たちが何に興味があって何を選びたいのかとなると、先ほど開成卒業生の谷さんがおっしゃっていた通り、いろんな体験をしたことによって「元の基礎学習に関してもやっぱり自分はこういうことに興味があるから、こういう基礎を大切にしなければいけないんだ」という、自分への落とし込みにも繋がっていくのかなと思います。

また、これを実践するとなると、やはり先生方の負担が多いなというのをすごく思うので、親としては先生方にすごく負担をかけているなという気がとてもしています。教員を増やしていただくとか、子供たちに関わる時間をもうちょっと増やせるようにその他の仕事を減らせるような組織作りみたいなのも必要なのかなと。私も親として色々なところで働いてきて、色々な体験をしたことで視野が広がって、子供たちにも「こうじゃなきゃいけない」じゃなくて「それぞれでいいんだ」という考えになれた気がします。自分体験なので、先生方にも教育以外のところでの学びというか体験をしていただける機会がもっとあると、先生方の心の余裕に繋がって子供たちへの関わりにも一助になるのではないかなという気がしております。

【山中委員長】

ありがとうございます。まさにそういうことだと思います。私も円山動物園と一緒に活動しているんですけど、先生が毎年1人来ているんですね。前は開成で今は清田高校の先生が行っていますが、そういう経験はとても役に立つようです。教員の学びの充実もぜひ進めてほしいですね。

さて、そろそろ時間なので、何か言い足りないことがあれば事務局の方にお寄せください。ワーキングの皆様と事務局には本日の協議内容を踏まえて、引き続き改革に向けた整理を続けていただくとともに、本日で高校改革の方向性について整理しましたので、この方向性を実現する具体的な取り組みについて検討いただければと思います。

続きまして「その他」について事務局から説明をお願いいたします。

【事務局：村山係長】

本日このような形で、今までの2回の検討会議と6回のワーキング会議を踏まえて、次の高校改革の方向性ということで、本日整理させていただきましたが、様々なご意見を伺ってまだまだ検討していかなければならないことが多いという実感いたしました。引き続きワーキンググループを中心にしながら方向性を整理し、委員長からもお話しいただいた通り、この方向性を具現化する具体の取組や施策について精度を高めながら検討を進めてまいりたいと思います。整理が進みましたら、また検討会議を開催させていただきますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

【山中委員長】

今の説明を含めて全体を通してご意見やご質問がある方はおられますでしょうか？

【信田委員】

清田高校の信田です。この会議に委員として初めて参加しましたが、校長会などで色々な意見が出た時に、「スクール・ポリシー」は作っているけれど「生徒たちが本当にそれを身につけているか、振り返っているか」と言うと、実際にはあまり振り返れていない。どうしたらいいかとなった時に、各校でスクール・ポリシーは作っているけれどバラバラで統一感がないんですね。その中で、先ほど松田さんが言っていたことですが、今市立高校が受験生から選ばれなくなっているところがあると思うんです。特に私立無償化になって、大通高校と清田高校は実は定員割れを起こしています。じゃあそこをどうやって特色を出してやっていくかというところがやっぱり大事なところだと思ったところで、市立高校単体で勝負するのも私立無償化となると厳しく、道立高校とも違って「市立高校に通うと何がいいのか」という特色を出さなきゃいけないのかなと。その中でこのコミュニティ化というのは特にいいとは思いますが、正直中学生は私立・市立・道立の違いを分かっていないことが多いです。そこを我々がいかにか「市立高校に来た時にはこんなことができるよ」というのを保護者や子供たちに教えていくかが大事なことで、そこら辺の落とし込みを今後やってもらえればというのが1点です。

それから令和14年度から新しいカリキュラムが始まります。そこに向かっていかなきゃいけない時に、子供たちが減っている中で市立高校も間口を減らしていかなきゃいけない現実もあるので、そこについても方向性を出していかないと魅力化が出ないのかなと思っています。

最後にいきなりやってきて申し訳ないのですが、実は方針の名称が好きではない。「（仮称）第2次札幌市立高等学校教育改革方針」というのが本当にこれでいいのかと。平成15年は「改革推進計画」で、平成29年は「教育改革方針」ですが、今回はもっと大胆に変えていかなきゃいけないので、ネーミングは変えた方がいいのではと個人的に思っています。国はグランドデザインとして「ネクスト・ハイスクール」と言っているのに、札幌市は平成29年と変わらない名前になるとちょっとまずいかなと。教員も子供も保護者も「札幌の市立高校に入れた方がいいんじゃないか」と思うようなネーミングも大事なかなと。堅苦しい名前ではなく、イメージが湧くようなネーミングも一緒に検討してもらいたいと思い、最後に一言言わせていただきました。

【山中委員長】

ありがとうございます。この会は意見が出るとそれを皆さんが大切にするという形で行われていますので、とてもいい発言だったと思います。

【杉山副委員長】

すみません、今の信田先生のお話を伺って、松田さんが「市立高校のブランディングについて、生々しい現実的な状況を踏まえた議論を」とおっしゃっていたことも含め、非常に重要だなと思いながら聞いておりました。

信田先生のお話を伺ったり、現場の校長先生方のお話を伺うと、この「コミュニティ」という言葉を使った時に、市立高校全体としてのコミュニティと同時に個別の学校のコミュニティの実状や課題が何なのかという現場の状況を聞くことで、非常にクリアに「そこが課題なのか、だからこういうことが必要なんだな」と思考が進むんですね。

可能な範囲で、そういった各校の管理職の先生方のお声をもっと聞かせていただきたいなと、一委員からの希望として申し上げます。

【山中委員長】

ありがとうございます。確かに私も第1回目の時に「各校を全部回りたい」みたいなことを考えていましたし、理想はありますけれど「生々しいところから議論してみるとどうなるか」ということもご検討いただければと思います。ちょうどお時間になりましたので、本日の会議を終了させていただきます。長時間ありがとうございました。

<終了>